

北海道ヒストリア

2026.09.14

歴史・文化

観光

利尻島

利尻町立博物館

鯨

北前船

北前船（きたまえぶね）の富を生んだ島

——利尻島・知られざるレガシー巡礼　【後編】

かつて、天下の台所・大阪の人々は、主に日本海航路で北海道と大阪を結ぶ商船や船乗りたちを「北前」と呼んだ。

北海の荒波を越えてきた船は、ひととき雄々しく見えたに違いない。

大きな富をもたらした北前船の交易。

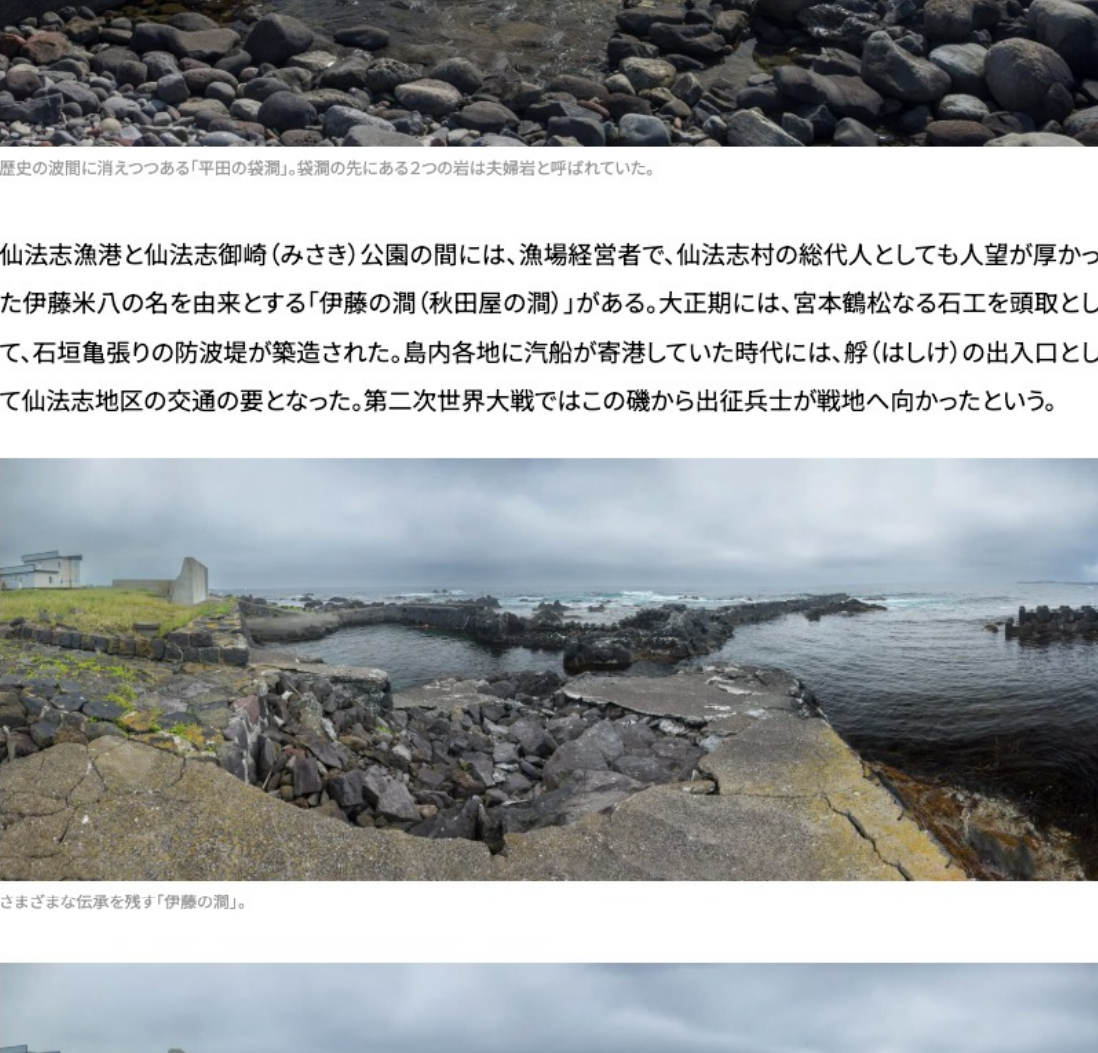
北海道からの荷の多くを占めたのは、畑作の肥料となる鯨粕（にしんかす）だった。

北前船の富を生んだ利尻島を訪ねると、想像を超えるレガシーに出会えた。

文：北室かず子/写真：田淵立幸

数珠つなぎの袋洞

鯨漁を今に伝えるレガシーが、【前編】で島巡りの最初に訪れた利尻富士町の「泉の袋洞」だ。南西部の利尻町仙法志（せんほうし）地区には、こうした袋洞やその痕跡が数珠つなぎのように連なっている。



歴史の波間に消えつつある「平田の袋洞」。袋洞の先にある2つの窟は夫婦窟と呼ばれていた。

仙法志漁港と仙法志御崎（みさき）公園の間には、漁場経営者で、仙法志村の総代人としても人望が厚かった伊藤八の名を由来とする「伊藤の洞（秋田屋の洞）」がある。大正期には、宮本鶴松なる石工を頭取として、石垣亀張りの防波堤が築造された。島内各地に汽船が寄港していた時代には、鯨（はしけ）の出入口として仙法志地区の交通の要となった。第二次世界大戦ではこの磯から出征兵士が戦地へ向かったという。

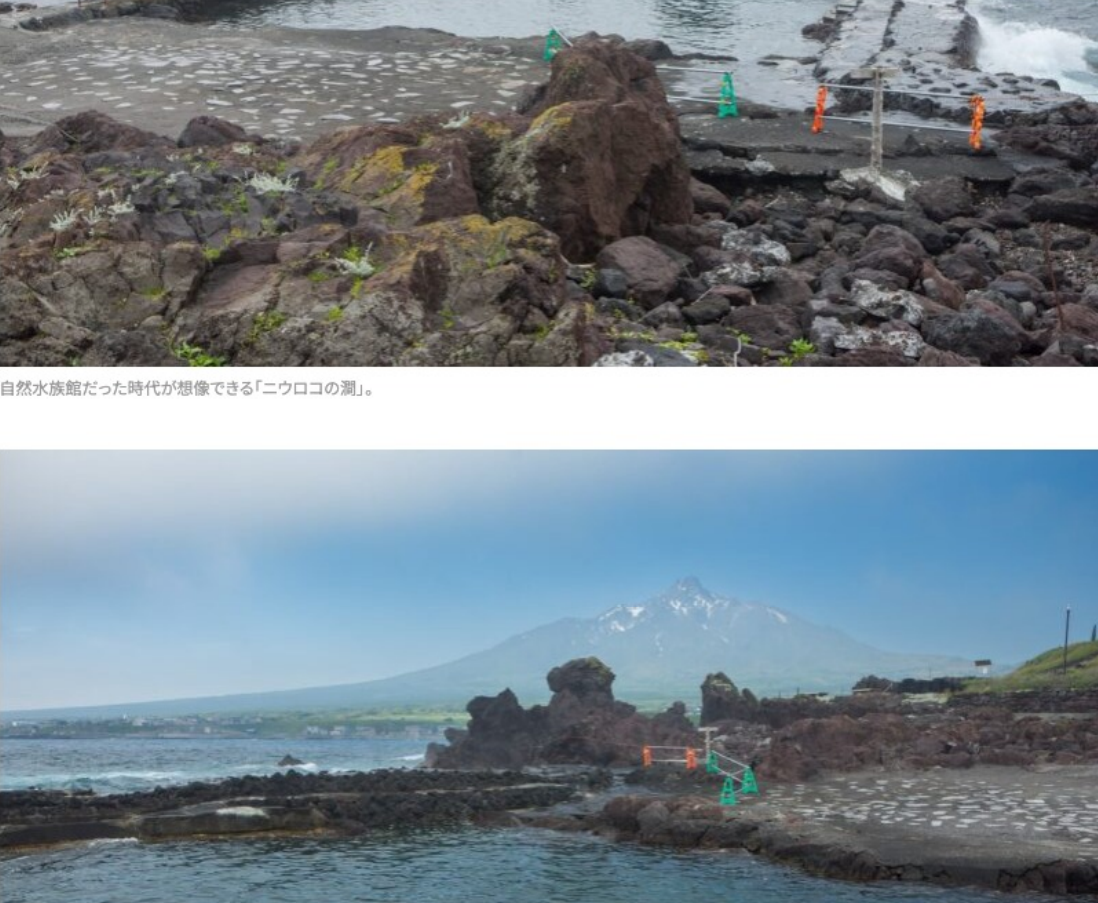


さまざまな伝承を残す「伊藤の洞」。



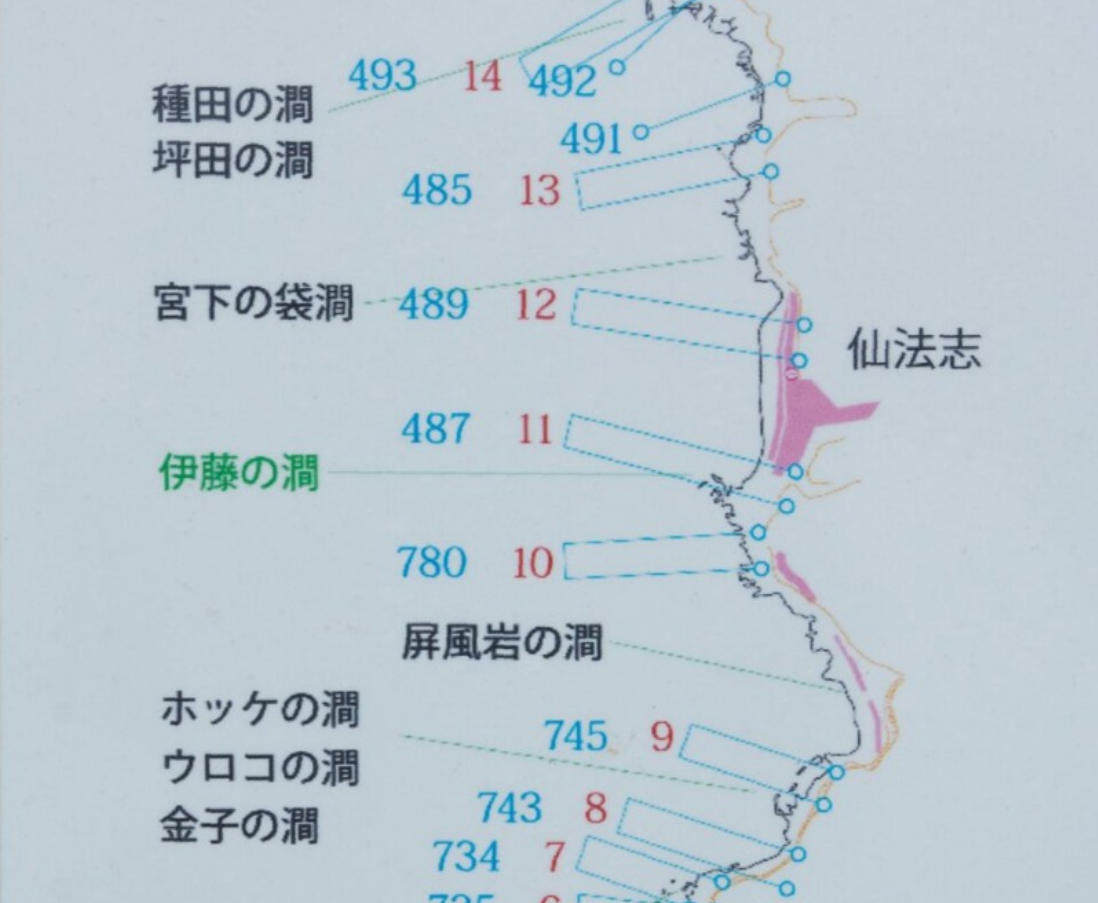
「伊藤の洞」の2つの洞のうち、鯨が入った袋が置かれたと伝えられる窟。

なお、同じ仙法志地区にある利尻町立博物館に、「伊藤の洞」のジオラマが展示されている。仕組みがよくわかるのでぜひともご覧あれ。

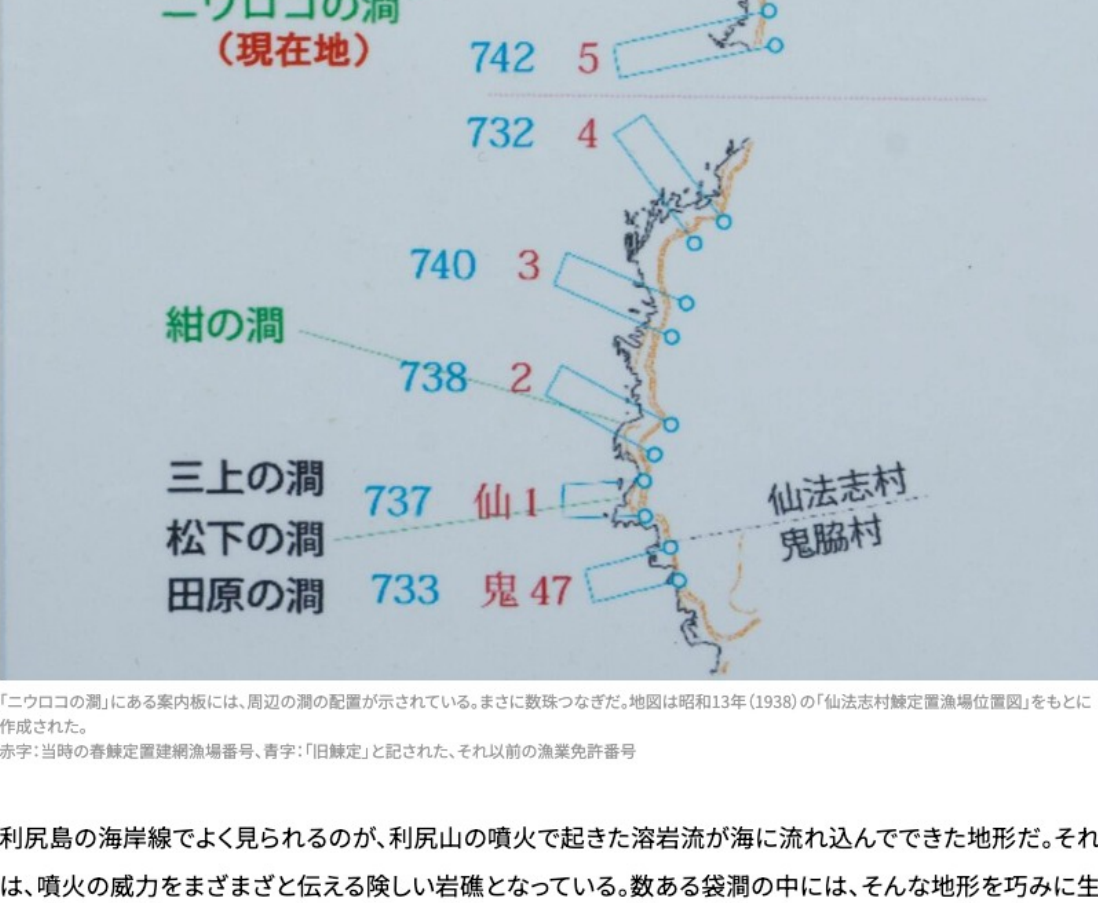


利尻町立博物館に展示されている「伊藤の洞」のジオラマ。写真提供＝利尻町立博物館

「ニウロコの洞」は、鯨漁の衰退で袋洞の役割を終えた後、ユニークな転身を遂げた歴史がある。自然そのままの水族館として使われていたことがあるのだ。ホッケやソイ、エソメバルなどが放され、泳ぎ回っていたという。



自然水族館だった時代が想像できる「ニウロコの洞」。



清らかな海水を運ぶ「ニウロコの洞」の背後に利尻山がそびえる。



「ニウロコの洞」にある案内板には、周辺の洞の配置が示されている。まさに数珠つなぎだ。地図は昭和13年（1938）の「仙法志村釧路定置漁場位置図」をもとに作成された。

赤字：当時の春鯨定置漁場番号。青字：「巨鯨定」と記された、それ以前の漁業免許番号

利尻島の海岸線でよく見られるのが、利尻山の噴火で起きた溶岩流が海に流れ込んでできた地形だ。それは、噴火の威力をまざまざと伝える険しい岩礁となっている。数ある袋洞の中には、そんな地形を巧みに生かしたものもある。

かつて鯨の鯨で膨れ上がった袋洞。今、青い清冽な海水で満たされた袋洞には、波の音だけが響いている。そして振り返って仰ぎ見れば、どの洞の背後にも必ず利尻山が高くそびえているのである。

考えてみれば、利尻山に降った雪や雨が過され、海中から湧き上がることで湧昇流が起こり、栄養塩が海面に昇ってきて豊かな海ができています。その栄養で昆布が育ち、ウニが昆布を食べ、昆布の茂る磯に鯨が産卵にやってくる。利尻山が引き起こす自然の循環こそが富を生んでいるのではないかと。

鯨は消えても

北海道を滑かせた鯨は、次第に北へ北へと漁場を移し、道央では昭和29年（1954）を最後に、利尻島では昭和30年（1955）前後を境に、姿を消した。その後、平成の世になってから石狩地方を中心に鯨漁が復活したのはとてもうれしいことだが、鯨が社会を動かした時代は、遠い過去のものとなった。



鯨を運ぶためのモッコ。左のモッコにはびっしり鯨の鱗がついているのに、昭和30年に作られた「竹谷漁場」のモッコは使われた形跡がない。隣行無電を思わせる。利尻島郷土資料館に展示。

利尻富士町教育委員会次長で学芸員の山谷文人さんいわく「鯨漁の衰退後、袋洞は注目されることもなく、ただ朽ちていくのみでした。そんな中で利尻富士町の産業振興課が、島全体で鯨漁に関するものを遺産群という形で残そうと、滞在型観光を見据えて声を上げたんです。袋洞を修繕して案内看板を設置し、清掃・普及活動を行ってきました」。それが北海道遺産「利尻島の漁業遺産群と生活文化」の認定につながった。

北海道遺産への認定を機に、新しい取り組みも始まった。遺産群のある利尻島全体が博物館であるとのコンセプトで「利尻しまじゅうエコミュージアム」という会が立ち上げられたのだ。遺産群の物語を解き明かし伝えていくことで、遺産群を活用する仕組みを構築するという。『しまじゅう通信』を発行し、札幌学院大学の学生さんにもモニターとして参画してもらっているんですよ」と山谷さんは言う。

北前船が鯨粕をはるか2,000kmも南へ運び、それが西日本の綿花や菜種や藍の肥料となった。その肥料のおかげで木綿や染料が育ち、繊維産業が日本の工業化を推し進めていった。

長年、利尻島の歴史を探究してきた利尻町立博物館 元学芸員の西谷榮治さんの言葉が印象的だ。「日本史の中で、利尻島は関西中心に出汁（だし）の食文化を作りました。お正月の縁起物として、昆布は飾りにも使われています。利尻島のみならず北海道のものが、日本の文化、経済を支えている部分というのはかなりあったと思います」。

秋と冬が混ざり合うぜいたくな島時間

島では、8月半ばを過ぎると秋の気配が濃くなり、9月下旬には山に雪が降る。東京都出身で利尻島在住25年になる山谷さんは、実感を込めてこう言う。「空気が澄みわたって、すごく景色がきれいなんです。情景の一番いい時期かもしれないですね」。

それは、標高差のある北の島だからこそ、秋と冬が混在するぜいたくな時間だ。富が生まれ、物語と文化が生まれてきた島が、きらめくレガシーを抱えて旅人を持っている。

INFORMATION

利尻町立博物館

住所	利尻町仙法志字本町136 📍 Google Map
電話番号	0163-85-1411
開館時間	9:00～17:00（入館は16:30まで）
休館日	月曜、祝日の翌日、年末年始（臨時休館日や臨時開館日があるため、事前にホームページでご確認ください）
入館料	一般200円、高校生以下無料
アクセス	宗谷バス「仙法志」停留所下車、徒歩約10分
関連リンク	https://rishiri-town.jp/%e6%95%99%e8%82%b2/%e5%88%a9%e5%b0%bb%e7%94%ba%e5%8d%9a%e7%89%a9%e9%a4%a8/ 🌐

※情報は取材時のものです。最新情報は各公式サイト等をご確認ください。

この記事の
《前編》を読む
2026.8.3公開

この記事の
《中編》を読む
2026.8.24公開

北海道ヒストリア 記事一覧はこちら

この記事をシェアする

